

| | |
|------------------|---|
| Title | 中根雪江の書翰 |
| Sub Title | |
| Author | 河北, 展生(Kawakita, Nobuo) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1964 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.37, No.3 (1964. 11) ,p.78(320)- 78(320) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 余白録 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19641100-0078 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

四六、同前第二、四三七頁

四八、同前第三、三六頁

四七、同前第三、一八一九頁

四九、松平春嶽全集第一卷、三三三十四頁

中根雪江の書翰

文久三年二月十九日に松平春嶽が政令帰一論を主張し、その日慶喜と共に中川宮を訪問して同意見を申してたことは続再夢紀事に記されているが、その時の情況を翌朝中根雪江が伊達宗城に報じた書翰の写を得た。左のごとくである。

二月廿日

中根鞠負

宇和島老公様

御左右衆中御披露

昨夜 宮様江罷出候都合至極宣候由橋公之被仰立候御次第一々御嘉納御同意に而近來 朝廷甚御不都合之御内情等も御内話被為在何分此体に而は逆も持明不申候間 宮様之御見込に而は明朝五半時頃御案内なしに鷹殿下へ御押懸け何分陽明殿下 宮様と御一座に而被仰立度御儀有之旨嚴敷御申立被相成 御両方も御同坐之上十分御手強に被仰立候へは 宮様之御取計ニ而両奏衆国事掛り等も可被仰遣左候へは鷹府は御手狭故陽明家へ被為入御一同大一坐にて御決心之上厳然確乎と御評論に相成可然其上に而又何とか御見込附候様可相

成との御相談御教示に御坐候由惣而御同論にて橋公春嶽も甚降心大慶仕候事御坐候右ニ付明朝五時より明公容堂君も御出懸春嶽も同様罷出候心得に御坐候何分明日之議論安危存亡之大機会と寒心之仕合に御坐候 御意ニ任せ昨夜之光景荒増奉言上候此段宣被仰上可被下候

頓首

右の中根の書翰をみると中川宮が慶喜・春嶽の申立てに極めて好意的であり、春嶽が二十日の鷹司邸での建白に大きな期待をかけ 出邸前に「今日は無事には帰るまし」と重臣に申し置いて出立した事情をより具体的に知ることが出来る。

(河北展生)